毎日新聞

書の甲子園 受賞者喜びの声

「書の甲子園」と呼ばれる「第31回国際高校生選抜書展」（毎日新聞社、毎日書道会主催）の審査結果が7日発表された。個人賞で、幕張総合2年の越川李美さん(17)が最高賞の文部科学大臣賞（全国で2人）に輝いた。拓大紅陵3年の小泉音巴さん(18)が大賞、ともに国府台3年の近藤優介さん(18)と野口小晴さん(18)が準大賞を受賞した。国府台は団体賞でも全国優勝を果たした。喜びの声を紹介する。

文部科学大臣賞

幕張総合2年 越川李美さん

味わいながら

「まずは入選」との思いで挑んだ作品だった。

作品は、平安時代の行書の古典である橘逸勢の法帖「伊都内親王願文」から抜粋した。桓武天皇の第8皇女である伊都内親王が、母の遺言により、山階寺（興福寺）に墾田などを寄進した際の文書だ。

ほぼ毎日ある書道部の稽古で、昨年はとにかく忠実に書き写す臨書に必死だった。だが、今年は自身の個性を出せるようにアレンジを加えた。筆の穂先を出さず押しつけるように書く「逆筆」を、味わい、楽しみながら書いた。帰宅途中の電車内でも作品を一文字ずつ見返し、改善点を探した。こうして、今大会に向け、約1カ月半で最も納得できた1枚を出したという。

小学1年で地元山武市の書道塾に通い始めて以来、ひたむきに書に向き合ってきた。将来は「教員免許を取っていつかは教える立場になりたい」と目を輝かせた。【林帆南】

完全燃焼できた

大賞 拓大紅陵3年 小泉音巴さん

初の大賞受賞に「信じられなかった。うれしい」と声を弾ませた。

小学1年で書道塾に通い始めた。高校からは書道部に入り、週6日は書と向き合った。夏休みや冬休みなどの長期休暇では、スイッチが入ると一日中、筆を握ることもあり、まさに書道漬けの毎日を送った。

今回受賞した書家、趙之謙の作品は、ずっしりとした作風と余白の使い方に魅了され、昨年から全力投球してきた。特に今大会前は家にこもって総仕上げのつもりで臨んだ。

今月18日、11月の文化祭でできなかった書のパフォーマンスを、保護者らを校内に招いて披露する。その様子は学校のホームページにアップされる予定で、今、仲間とその準備に余念が無い。

「書の甲子園で完全燃焼できた」といい、書は高校卒業で一区切りを付けるという。大学でまた新しい自分を探すつもりだ。【浅見茂晴】

準大賞

個性込めた自信作

国府台3年 近藤優介さん

「今回の結果を受け止めて、より自分の弱点を克服し、もっとよい作品を作りたい」と話す。【石塚孝志】

準大賞

独特の構図に工夫

国府台3年 野口小晴さん

た」と話す、まさに自信作だった。